報告

島津勝久豊後に走り沖濱に死す

市瀬宗隆

島津第十四代太守勝久は文亀三年（一五〇三）八月十日父忠昌の三男として孤々の声を挙げた。母は豊後大友政親の女である。

時あたかも下剋上の勢ようやくきざして社会が混乱した暗黒時代で、忠昌も文明六年立久の後を襲うて守護として三州に君臨したが、威令行われず国中各地に賊徒の蜂起するもの多く盛んに郡県を剽掠し、さしもの忠昌もこれ等を制圧するにも其の力尽き、遂に意を決し泉下の鬼となつて反逆の徒を滅さんものと、永正五年（一五〇八）二月十五日の夜清水城中月前に於いて西行法師が歌「ねがわくは花の下にて春死なん　そのきさらぎの望月の空」を高々に吟じ劍を執つて自殺した。時に享年四十六歳であつた。

此処に於いて長男忠治―延徳元年（一四八九）正月十七日生、母は大友政親の女―二十歳にして後を嗣ぎ第十二代領主となり、賊徒の征伐に須臾も安居する間もなき治世わずか七年にして病に臥して遂に再び起つことも出来ず、永正十二年（一五一五）八月二十五日城中で永眠したが、後で島津の津と大友の友の字を取つて蘭窓津友と謚した。

次いで次子忠隆明応六年（一四九七）生、母は忠治に同じ―が嗣ぎ第十三代太守として立つたが、これも僅かに四年にして即ち永正十六年（一五一九）四月四日急に痘疹を病んで居城に於いて享年二十三歳をもつて卒した。この両兄の後に襲立つたのが勝久であるが、いまだ十七年の弱輩であり而もねい臣にあやつられ統御の能に乏しく、父兄の時代よりも更に一層乱麻の状態に突入した。

勝久の初室は同族薩摩国出水の領主島津実久の娘であり、実久は己の子義虎を勝久の嗣子とせんとの野心をいだいたが、後に実久の女を離別したので、遂に勝久と実久との間にすきが生じ、実久は賊党の頭目として敵対する様になつて益々收拾・鎮圧の策も執られず、遂に詮方なく大永六年（一五二六年）十一月、同族島津忠良の子貴久を養嗣子と定め、国事を忠良に托したのである。

天文の初年頃か勝久は大隅国根占領主禰寝重親の女を迎えて室とした。天文三年一（五三四）十月二十五日に勝久のねい臣末弘忠重を谷山の皇徳寺で川上昌久等の忠臣が誘殺する事件があつた。此処で、勝久は難が我身に及ぶことを恐れて後室の生家を頼り妻子を連れて遁れた。時に生後九十四日を経た長男益房丸を携えた訳で、丁度天文四年の出来事である。

此処も安住の地でなかつたので此の年更に大隅国帖佐領主和答院重武に勝久のみ身を托し、いくばくもなく次いで北隅の吉松に北原氏の庇護を受けるべく潜れたが、再び転じて日向国に走り、都城主北郷忠相、忠親父子を頼つて逃れた。此の頃、勝久は室禰寝氏及び長子共に北郷家の食客となつたらしい。又日向国都城にあるとき二女大友の一者となつた女も同地で生れたが、忠親の室は勝久の後室禰寝氏の父の姉妹であつたので、此処では相当永年居付いたらしいが、天文の十二、三年頃遂に豊後に走り失意の日日を母家大友氏の扶持を受ける身となり、味気ない世をかこち乍ら天正元年（一五七三）十月十五日豊後滞在足掛け三十年間にして豊後沖の浜の地に於いて七十一歳の生涯を終えた。一説には勝久は後、薩摩に帰国し桜島に於いて死去したとも云われる。斯くの如く父忠昌以来四代にわたり各々苦難の生涯を送らねばならなかつたのは島津同族相食むの内訌に原因の多くを認めるべきであろうが、更に敵国大友氏の女の出である勝久等兄弟に領民のなじみが浅かつたと言べきであろうか。

これより先、勝久都城北郷家に居候中室等と同居したらしい長子益房丸忠良（一に忠康に依る）は七歳、天文十年（一五四一年）のとき、日向の飫肥領主伊東修理太夫義祐に身を寄せて居るが、後帰国して元和四年（一六一八年）十一月二十二日八十四歳の高齢で卒している。これは伊東義祐の父、祐充に北郷忠親の妹が嫁していた。

又祐充の女が忠親の子久道に嫁している等の血縁関係があつた故であろう。勝久も或は伊東家に一時身を托したかも判らないが、いまだ資料文献に見当らない。

勝久が豊後に走つたとき妻子も同伴したものと考えられる。即ち二女は大友宗の合となり江戸に卒す。或は常陸の配所で慶長十年（一六〇五年）死去したとも云う。は大友義統が常陸の配所で慶長十年の同年に死去した事実と併せ考えてうなずけるし、尚次男久孝又六郎三男又四郎も豊後に走つたらしい。

勝久が豊後入りした直後即ち、天文十四年府内に近い神宮寺浦に支那ジャンク船で数人の南蛮人が漂着したが、義鑑がジャンク船長と策謀して豊富な彼等の積荷を没収せんとしたが、息子の義鎮に諫められて思い止つた事件。

ディエゴ、ヴァス、テテアガランと云うポルトガル人が来着、五ケ年豊後に定住朝夕祈禱書及びコンタツをもつて何時もオラショを捧げるあり。

天文十九年（一五五〇年）十二月十二日に突発した大友家の御家騒動により、義鑑が臣下の津久見、田中に傷けられて逝去した事件。

天文二十年（一五五一年）にはフランシスコ・ザヴイエル聖師の豊後入り等誠に多事多端であり、次いで義鎮の絶大なる

庇護により豊後切支丹が盛んに伝播する時期であつて、勝久の女が薩摩の文献に依ると義統の母であつて前述の如く慶長中に常陸の配所で死んでいる等から考へ、少くとも勝久父子共に宗麟の教訓で切支丹に理解をもち乍ら流転の生活の淋しさを宗教によつて満していたかも知れない。異国の神父等と必ず交渉があつたと想像されるが、豊後に於いて勝久に関する文書並びに伝説等はないものか、死地の沖の浜とは何処でしようか、大分史学会の方で勝久の事蹟に就いて御研究の方は居られませんでしようか。

勝久死後いくばくない天正五年（一五七七年）には、日向の伊東三位入道が島津に逐われて都於郡城をすてて豊後大友宗麟に頼つて臼杵城に入るあり、これよりさき天正二年（一五七四年）には土佐の一条兼定が国を逐われて宗麟に身を寄せて豊後に来た事左上は、種々と文献資料もあり度々研究の発表等に接しますが勝久の豊後入り後は遙として不明である。

只、薩摩資料として二、三の文献に勝久の事項及び末裔の顚末が散見され、かすかにその末路及び裔孫の生涯が偲ばれるのみである。即ち、

勝久裔の略系図（西藩野史）

勝久
- 女　十三歳にて夭亡　母は島津実久の女
- 一に忠康に依る　修理太夫　益房丸
- 忠良　天文四年七月五日鹿児島北城に生九十四日にして母と俱に船庭山稜式部大輔重就に頼り逃る七歳にして伊東修理太夫義祐に拠る後国に帰り元和四年十一月二十二日八十四歳にて卒す高山昌林寺に葬る
  - 久孝　又六郎　豊後乱に他邦に來る
  - 男
- 女　大友家の一之台となる江戸に卒す
- 又四郎　豊後の乱他邦に走る
- 宗俊　兄又四郎のため殺さる
- 良久　又三郎　永禄五年生十七才義弘の命に依り曾於郡念佛寺十世の住持僧となる正円と云ふ
- 秀久　天正十九年太守公の命にて還俗し藤野久右衛門と称し除髪して恕世と云ふ
- 虎房丸　兄二人僧となる季子なれど父忠良の後もつぐ
  - 亀山又兵衛忠辰と称す
  - 島津家伝の重宝をことゝく大守公に献ず
  - （三郎兵衛忠辰の裔、気惡逆至極につき遠島処分さる）

大友略系図（鹿児島外史　伊加倉俊貞著）

親厚
- 十一世従五位下
- 親重　豊後寺
- 義長　十二世従五位下修理太夫　永正五年五月十一日卒

- 親忠　從五位下　備前寺
- 政親　十二世從五位下　豊前守左近將監
  - 女　島津陸奥守忠昌室
  - 義倉　修理太夫（義長同人）　宗統家督
- 義鑑　十四世從五位下修理太夫
  - 義鎮　十五世從四位下修理太夫　左衛門督号宗麟
    - 義長　初大友八郎　後大内右京太夫　大内義隆家督相統　爲毛利所攻自殺
  - 爲家臣所殺
  - 義武　菊池　初大友兵衛尉　後肥前守　爲朝義鎮所攻　肥豊国木原庄
- 義統　左衛門督從四位下宰相　豊後守母者島津陸奥守勝久女慶長十年死常陸配所
  - 義延　大友総四郎　左衛門佐從四位下侍從　慶長十七年死武藏配所
  - 親家　長三郎
  - 義信　左京亮
  - 義則　左京亮
- 親盛、政照　右京亮
  - 義孝　大友内藏介從五位下左近將監　爲幕府表高家衆賜錄十石

前記資料に依れば勝久の女、天文八年（一五三九年）頃の生となり、宗麟享祿三年（一五三〇年）生とすれば宗麟二十九歳、勝久女二十歳のときに義統を生んだ事になる。

他の資料に大友系図義統の母は奈多大宮司鑑元の女であつて果して実母が何れか考証されないが、仮りにも薩摩の資料にある義統の母が勝久の女でなかつたにしても、妾として義鎮と関係なかつたとは云われない。

尚勝久薩摩に在つて最も苦労して居た天文元年（一五三一年）には、幕府の命に依つて大友義鎮の筑後生葉城に星野忠攻めに義鎮の弟菊地肥前守義武（勝久と従兄弟）大内義隆等と兵を合わせて協力している。依つて勝久も一条兼定、伊東三位義祐等の例の如く大友より厚く遇なされたものと認めらるべきであろう。唯、資料欠除して解明出来ないのみか。

（鹿児島県薩摩郡大村）

新著紹介

「宇佐史研究」の復刊

故小野精一氏によつて通巻一二四号まで発刊された「宇佐史談」は戦時中以来休刊となつていたが、この度中野幡能寺によつて復刊され、「宇佐氏研究」と改めてすでに二号を公けにした。同人の健斗を祈ると共に、同誌の発展を祝福したい。内容目次左の通り。

一二五号
宇佐八幡の中央進出　中野幡能
宇佐荘園の下人　中野幡能
一二六号
宇佐仏教と虚空蔵寺　中野幡能
八幡神の性格　中野幡能